

下咽頭を原発とした転移性陰茎腫瘍の1例

聖マリアンナ医科大学泌尿器科学教室 (主任：井上武夫教授)

馬場 克幸, 矢島 通孝, 大山 登

岩本 晃明, 長田 尚夫, 井上 武夫

聖マリアンナ医科大学第一病理学教室 (主任：及川 清教授)

品 川 俊 人

METASTATIC PENILE TUMOR FROM LOWER PHARYNX: A CASE REPORT

Katsuyuki Baba, Michitaka Yajima, Noboru Ohyama,
Teruaki Iwamoto, Takao Osada and Takeo Inoue

From the Department of Urology, St. Marianna University School of Medicine

Toshihito Shinagawa

From the Department of the First Pathology, St. Marianna University School of Medicine

Metastatic tumor of the penis is uncommon and only 95 cases have been reported in Japan. A 70-year-old man, who had squamous cell carcinoma of the lower pharynx, complained of urethral induration. Biopsy was performed and pathological diagnosis was metastatic tumor of penis originating from the lower pharynx. Although partial response in tumor size was noted by irradiation therapy, the patient died of multiple metastases in the 4th month after the diagnosis. This case is the first report of metastatic penile tumor originating from the lower pharynx.

(Acta Urol. Jpn. 36: 1467-1470, 1990)

Key words: Metastatic penile tumor, Lower pharyngeal tumor

緒 言

転移性陰茎腫瘍は比較的稀な疾患で、本邦ではわれわれが調べた限り、現在まで95例報告されているにすぎない。今回われわれは、下咽頭を原発巣とする転移性陰茎腫瘍を経験したので、これを報告する。

症 例

患 者：70歳，男性

主 訴：陰茎の硬結

家族歴，既往歴：特記すべきことなし

現病歴：1986年10月，嚥下困難を主訴に当院耳鼻咽喉科を受診し，下咽頭癌 T+N1M0 と診断された。11月よりシスプラチン 80 mg，ペブレオマイシン 5 mg の化学療法1クール施行後，12月喉頭食道全摘術を施行した。病理組織学所見は，未分化型扁平上皮癌であった (Fig. 1)。1987年2月左肺下葉に転移巣を認め，左下葉部分切除術を施行，7月には同化学療法2クール目を施行したが，両肺に多発転移をきたし，



Fig. 1. 原発巣の病理組織像。低分化な扁平上皮癌で表層の扁平上皮と連続性を認めた。この周囲に潰瘍が存在していた。

1988年3月には頸部リンパ節転移も出現した。その後嚥下困難が増強し，5月より同化学療法3クール目を施行するも下痢のため中止，同月より放射線を頸部，鎖骨窩にそれぞれ計40 Gy照射を開始した。患者はその頃，陰茎の硬結に気づき，当科へ併診されてきた。

現症：身長 172 cm, 体重 51 kg, 体格中等度, 栄養は不良で, 陰茎腹側中央の皮下に可動性の乏しい 20×15 mm の無痛性の腫瘤を認めた。

検査所見：末梢血：WBC 13,400, RBC 259×10⁴, Hb 8.7 g/dl, Hct 25.7%, Plt 332×10³, 生化学：TP 6.3 g/dl, T. Bil 6.3 mg/dl, GOT 22 mU/ml, GPT 15 mU/ml, LDH 1,348 mU/ml, ALP 497 mU/ml, Cr 0.8 mg/dl, BUN 23 mg/dl, Na 131 mEq/l, K 3.9 mEq/l, Cl 90 mEq/l, CEA 1.9 ng/ml, AFP 3.6 ng/ml, CA-19-9 12.6 U/ml, SCC 0.9 ng/ml,.

超音波所見：尿道に近接する hypoechoic な腫瘍を認めた (Fig. 2).

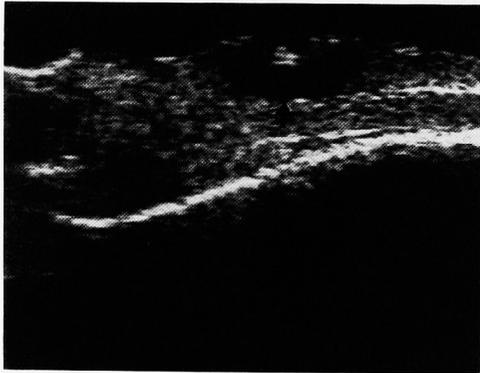


Fig. 2. 陰茎の矢状面エコー像. 尿道に近接する hypoechoic な腫瘍像を認めた.

その後の経過：1988年5月30日に陰茎部腫瘍生検を施行した。病理組織所見は下咽頭と同様の、より未分化な扁平上皮癌で、原発巣からの転移性陰茎腫瘍と診断した (Fig. 3)。6月29日より頸部に電子線治療を計 60 Gy 行い、ほぼそれに並行して、7月1日より陰茎部腫瘍に計 50 Gy (2 Gy/day) の電子線治療を5週間にわたり行った。電子線治療前の陰茎部腫瘍の大きさは 23×17 mm であったが、治療後は 5×5 mm に縮小し、局所の効果を認めた。しかしながら、患者は10月5日、転移性陰茎腫瘍の診断から約4ヵ月後、多発性転移のため癌死した。

考 察

陰茎への腫瘍転移は、その豊富な血液供給と前立腺・膀胱・直腸といった近接臓器に悪性新生物が高率に発生するにもかかわらず稀である。転移性陰茎腫瘍の報告は、1870年 Eberth¹⁾ の直腸癌の陰茎海綿体転移例が最初であり、欧米では約200例、本邦では1934年斎藤²⁾ の報告以来自験例を含め96例⁷⁻¹⁰⁾にすぎない。

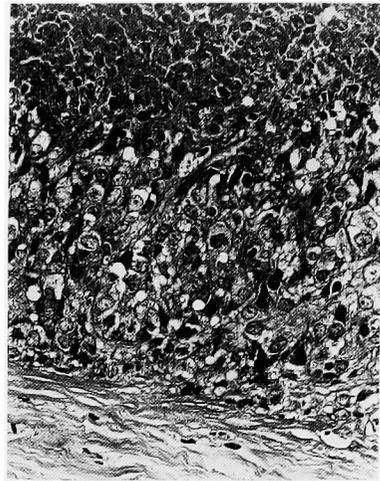


Fig. 3. 陰茎転移巣の病理組織像. 原発巣よりさらに低分化な扁平上皮癌の像を示していた.

原発巣としては、膀胱・前立腺・腎盂尿管・直腸の順に多く、尿路器と骨盤内臓器よりの転移が84%を占めている (Table 1)。これに対して骨盤外臓器よりの転移は少ない。下咽頭癌の遠隔転移は、血行性に肺、肝に転移することが多く、骨盤内に転移することは稀であり、陰茎転移の報告は、欧米および本邦を通じてわれわれが調べた限り自験例が最初である。

転移性陰茎腫瘍の転移経路については、Abeshouse

Table 1. 転移性陰茎腫瘍の原発巣.

原 発 巣	症例数 (%)
泌尿器系	73 (76.0)
膀胱	30
前立腺	23
腎盂尿管	10
腎	6
辜丸	2
尿道	2
消化器系	14 (14.6)
直腸	8
胃	4
食道	2
呼吸器系	5 (5.2)
肺	4
鼻咽腔	1
その他	4 (4.2)
縦隔	2
皮膚	1
下咽頭	1
計	96 (100)

ら¹¹⁾が述べているように, 1) 直接浸潤, 2) 接種, 3) 器械操作, 4) 動脈性, 5) 静脈逆行性, 6) リンパ管逆行性が考えられている. Paquin & Roland¹²⁾, Abeshouse ら¹¹⁾, 三品ら¹³⁾は, これらのなかで静脈逆行性転移が有力な経路であると述べている. すなわち, 深部陰茎背静脈は前立腺および膀胱の静脈叢へ注ぎ, この静脈叢は骨盤内臓器と密につながっている. これら静脈系の中枢側で腫瘍栓塞が生じたり, あるいは何らかの原因で胸腔腹腔内圧上昇をきたしたときには, 血流が一時的に逆流し, 腫瘍細胞の逆行性転移が起こると考えられる. Abeshouse ら¹¹⁾は腎腫瘍に続発した陰茎腫瘍12例中左腎原発が9例も見られたことから, この説を強く主張している. 自験例では遠隔臓器を原発とし, 肺肝転移をきたしたことから動脈性転移が疑われる.

以上のことから, 一般に転移性陰茎腫瘍の転移経路は, 単一の経路で説明することはできず, 複数の経路で転移が起こると考えられる.

転移性陰茎腫瘍の臨床症状は, 陰茎部の腫瘍が59.1%と最も多く (Table 2), 孤立性結節の形をとることが多い. その発症部位は, 陰茎海綿体が最も多く, 尿道海綿体に発症することは稀である¹²⁾. このことは病巣が尿道海綿体へ浸潤することによって現われる排尿困難や排尿痛などの症状が転移性陰茎腫瘍では少ないことと一致している.

Table 2. 転移性陰茎腫瘍の臨床症状.

臨床症状	症例数 (%)
陰茎腫瘍	52 (59.1)
持続勃起症	39 (44.3)
陰茎痛	23 (26.1)
排尿困難	12 (13.6)
排尿痛	4 (4.6)
尿閉	2 (2.3)
頻尿	1 (1.1)
残尿感	1 (1.1)
症例数	88
不明	8
計	96

つぎに多い症状として自験例では見られなかったが, malignant priapism があげられる. Abeshouse ら¹¹⁾は38.1%に, Paquin ら¹²⁾は40%に, 本邦では奥村²⁾によると50%に malignant priapism を認めていると報告している. 一方原発性陰茎腫瘍では, Abeshouse ら¹¹⁾によると7%に malignant priapism を認めていることから, 転移性陰茎腫瘍の方が

その発生率の高いことを示している. このことは, 転移性陰茎腫瘍の発生部が陰茎海綿体に多いのに対し, 原発性陰茎腫瘍の多くが陰茎先端に発生することからも理論的に一致する結果となっている.

本症の治療としては外科療法・化学療法・放射線療法が, 単独あるいは併用して行われているが, すでに他臓器への転移も認められることが多いので予後はいずれもきわめて悪い. 外科的治療に関しては全身状態が良好で, 陰茎部痛や持続勃起症の除去を目的とする場合には意義があると思われる. 局所放射線療法は全身状態がかなり悪化している症例にでも行えるので, 本邦でも多く施行されているが, 著効例の報告は少ないようである. 自験例では, 原発巣がすでに進行していることと排尿困難や排尿痛を認めなかったので外科療法は行わずに前述のように局所放射線療法を施行し, 縮小効果を認めた.

転移性陰茎腫瘍の予後は著しく悪く, 本邦で最も長期に生存したのは上野ら¹⁴⁾の胃癌症例の2年11ヵ月で自験例のように多くは1年以内に死亡している.

結 語

下咽頭癌を原発巣とする転移性陰茎腫瘍の1例を報告し, 若干の文献的考察を行った.

文 献

- 1) Eberth CJ: Krebsmetastasen des Corpus Cavernosum Penis. *Vrchow Arch[A] Pathol Anat* 51: 145-146, 1870
- 2) 齊藤弘徳: 各種臓器に転移を来し陰茎硬直を伴える腎臓癌腫の1例. *日泌尿会誌* 23: 789-790, 1934
- 3) 奥村 哲, 平沢精一, 由井康雄, 吉田和弘, 西村泰司, 秋元成太: Malignant priapism を呈した直腸原発転移性陰茎腫瘍の1例. *泌尿紀要* 30: 205-215, 1984
- 4) 大藪裕司, 吉武信行, 江藤耕作: 孤立性陰茎転移によって発見された腎細胞癌の1例. *西日泌尿* 46: 1387-1394, 1984
- 5) 薄井昭博, 中本貴久, 石野外志勝, 福重 満: Malignant priapism を呈した転移性陰茎腫瘍の2例. *西日泌尿* 47: 843-846, 1985
- 6) 本多正人, 亀岡正人, 三好 進, 岩尾典夫, 水谷修太郎: 続発性陰茎腫瘍の2例. *泌尿紀要* 31: 2273-2279, 1985
- 7) 武縄 淳, 佐々木美晴, 上野陽一郎, 秋山文弥: 肺癌を原発とする転移性陰茎腫瘍の1例. *泌尿紀要* 33: 1281-1284, 1987
- 8) 堀井康弘, 森田 昇, 吉川元祥, 佐々木憲二, 平尾佳彦, 岡島英五郎, 斉藤宗吾: 陰茎転移により発見された性腺外上皮腫の1例. *泌尿紀要* 34: 1057-1061, 1988

- 9) 安尾 信, 生沢啓芳, 山田恭司, 宗 正幸, 竹下俊文, 亀谷 忍, 飯島 登: 直腸癌陰茎転移の1例. 大腸肛門誌 **37**: 735-740, 1984
- 10) 久保和夫, 橋爪鈴男, 下田祥由, 栗原正典, 高桑俊文: 陰茎に生じた転移性皮膚癌の1例. 臨泌 **37**: 933-936, 1983
- 11) Abeshouse BS and Abeshouse GA: Metastatic tumor of the penis: a review of the literature and a report of two cases. J Urol **86**: 99-112, 1961
- 12) Paquin AJ and Roland SI: Secondary carcinoma of the penis: a review of the literature and a report of nine new case. Cancer **9**: 626-631, 1956
- 13) 三品輝男, 大江 宏, 宮越国雄, 村田庄平, 大山朝弘, 芦原 司, 北村忠久: 睾丸腫瘍の陰茎転移例. 日泌尿会誌 **63**: 57-67, 1971
- 14) 上野 精, 藤間弘行: 胃癌の陰茎, 副睾丸転移の1例. 臨泌 **28**: 449-453, 1974

(Received on January 22, 1990)

(Accepted on July 1, 1990)